

A・MUSEUM

vol.64
[2010.9.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



母子島遊水地（筑西市飯田）から見た筑波山



恋瀬川（石岡市高浜）から見た筑波山（撮影：今井初太郎）

筑波山七変化

筑波山は平地から一気に877mの高さまでそそり立ち、茨城県南、県西地域の大部分からその姿をみることができます。筑波山のある風景が原風景となっている方も多いでしょう。その筑波山は、みる場所によって大きく形を変えることをご存じでしょうか。東西南北とみる方向を変えると、山頂や稜線の形などが大きく変化します。筑波山への思い入れがある方は多く、自分のすんでいる場所からみる筑波山が一番美しいと答える人が多いのはおもしろいことです。

筑波山はいろいろな樹木がモザイク状に森林をつくり、春の新緑、秋の紅葉など、季節によって山の色が変化していきます。さらに、山頂付近はふもとより5℃ほど気温が低いため、冬には、平地では雨でも雪がふることも多く、真っ白にお化粧した姿をみることもあります。
(資料課 小松崎 茂)

第50回
企画展

筑波山

— ブナとガマと岩と —

Vibrant Mt. Tsukuba! Discover beeches, toads, and boulders!

「空には筑波 白い雲」と茨城県民の歌にあるように、筑波山の名前は茨城県民なら誰でも知っています。その筑波山には、奇岩とよばれる大きな岩があり、ブナ林を代表とする豊かな森林が広がり、その森林をすみかとするさまざまな動植物が生息しています。

今回の企画展では、季節とともに姿を変える生きものと筑波山の成りたちなど、特徴ある筑波山の自然の魅力を紹介します。また、当館が筑波山で行っている動物、植物、地学それぞれの分野の調査、研究についても報告します。

動物分野ではハナバチ調査について報告します。ハナバチは幼虫の餌として花粉や蜜を蓄えるハチの総称で、クマバチやマルハナバチなどがそのなかまです。植物とも密接に関わりのあるハナバチをとおして筑波山の姿をみます。植物分野では筑波山の山頂付近に広がるブナ林の調査について報告します。筑波山に生育するブナについて、1本1本の位置や大きさ、衰退度を



筑波山のブナ林

測定し、ブナの戸籍簿をつくっています。地学分野では筑波山をつらぬく霞ヶ浦用水筑波トンネルがつくられたときにでた岩石標本から詳しく分かった筑波山の地質構造などについて紹介します。

よく知っている筑波山の新たな一面を、今回の企画展で発見してください。(資料課 小松崎 茂)



筑波山で発見命名された植物 ツクバトリカブト



ガマガエルとよばれるアズマヒキガエル



クマバチ



奇岩のひとつ ガマ石



球状花崗岩 (小判石)

展示構成

- 第1部 筑波山はどんな山
- 第2部 筑波山の四季
- 第3部 筑波山の成り立ち
- 第4部 筑波山の動物
- 第5部 筑波山の植物
- 第6部 筑波山と人との関わり
- 第7部 第Ⅱ期第1次総合調査報告

会 期 2010年10月9日(土)～2011年1月10日(月)

開館時間 午前9時30分～午後5時まで(入館は午後4時30分まで)
休 館 日 ・毎週月曜日(10/11, 1/10は開館し、翌日が休館)
・2010年12月27日(月)～2011年1月1日(土)

●記念シンポジウム「これからの筑波山を考える —筑波山の生物多様性から—」

日時：10月9日(土) 13:30～15:30
場所：博物館内
対象：中学生以上
定員：300名(先着順)

●記念観察会「筑波山まるかじり」

日時：10月17日(日) 10:00～14:00
場所：筑波山(現地集合)
対象：小学生以上(小学生は保護者同伴)
定員：30名(抽選)
参加費：保険料ひとりにつき50円

●記念観察会「秋のキノコを観察しよう」

日時：10月24日(日) 10:00～14:00
場所：筑波山(現地集合)
対象：小学生以上(小学生は保護者同伴)
定員：30名(抽選)
参加費：保険料ひとりにつき50円

筑波山の生物多様性

～国際生物多様性年2～

筑波山は、霞ヶ浦とともに水郷筑波国定公園すいごうつくばこくていこうえんの区域内にあり、茨城県を代表する自然です。また、そればかりではなく、古くから山岳信仰で名をはせており、文化的な価値も高い地域です。

筑波山に生育する植物について、当館の総合調査の成果をもとにみても、分類群ごとにこれまでに確認された種数は、維管束植物（種子植物とシダ植物）が約1,000種、コケ植物が約200種、地衣類が約70種、菌類が約400種となっています。この数字は、各分類群ごとに県内で記録されている種数の半数以上または半数近くが筑波山に生育することを示しており、筑波山がいかに生物多様性の高い地域であることを示しています。

なぜ、筑波山には、多くの植物が生育しているのでしょうか。その最大の理由は、筑波山が標高877mと低山でありながら、関東平野からすくくとそそり立ち、垂直的に変化に富む自然をもっているからといえます。気候的には、中腹までが暖温帯、山頂付近が冷温帯となります。筑波山を分布の南限とする北方系の植物、また、北限とする南方系の植物も数多く生育しています。

筑波山には、山頂付近にブナ林、山腹にアカガシ林

やモミ林、スギ林、山麓さんろくにスタジイ林やアカマツ林、そしてつつじヶ丘周辺のススキ草原というように、多様な生態系がそろっています。そして、これらの自然は、古くから山岳信仰の対象として手厚い保護を受けてきたという歴史をもっています。

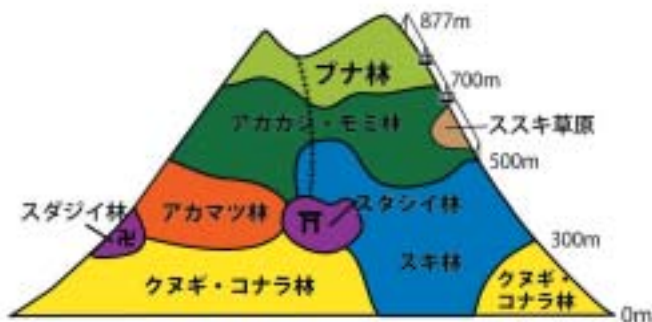
このなかで、特筆すべき自然は、山頂付近のブナ林おしほでしょう。ブナは、北海道の渡島半島から九州の大隅半島まで日本に広く分布しています。しかし、葉の大きさや樹形を比べると各地で大きな変異をみることができます。その違いを遺伝子レベルで分析すると、筑波山のブナは、日本海側と太平洋側に分かれるグループのうち太平洋側のグループに属します。さらに、筑波山のブナは、東海地方を隔てて、紀伊半島のブナとよく似た遺伝子をもっています。そして、小さな集団であるにもかかわらず、遺伝子の多様性が高いことがわかっています。

このブナの集団を守ることは、大きな意義があります。一昨年から、当館では、およそ8,000個体あると推定されるすべてのブナの大きさや位置を測定しています。これが、筑波山のブナ林が将来どのように変化するかを捉えるための大事な戸籍簿となるのです。

(企画課 小幡和男)



筑波山のブナを1本1本調査する



筑波山で見られる森林や草原（模式図）

筑波山

私はこれまで一度も筑波山に登ったことがありません。

出生地は都内ですが、生まれて間もなく激しさを増す戦火を避けるため、母の実家である飯島村（現坂東市）に疎開し、小学校に上がる直前までそこで生活を続けました。

その後も中学校時代のほとんどの夏休みを母の実家で過ごしましたが、男の子がいなかったため、祖父母はもちろん、伯父叔母には我が子このように可愛がってもらい、西仁連川で

水泳や魚釣りを楽しみました。外出時にはいつも事故にあわないよう祖父が見張り役兼遊びの先生として同行し、いろいろと教えてくれました。そんな生活を過ごす一時間の間に、よく筑波山を眺めました。子どもにとって遠くに見えるその山は大変雄大で、登ることへの発想はありませんでした。ある時、夏休みの最後に東京から迎えに来た母と一緒に山を眺め、大きくなったら登ってみなさいといいました。

コラム by director SUGAYA

この企画展を機に、ぜひ筑波登山を実現したいものです。



イラスト:太田有香 (ミュージアムコンパニオン)

筑波山のハナバチ

～研究ノート1～

ハナバチ（花蜂）は、幼虫の餌として花粉や蜜を蓄えるハチの総称です。スズメバチやアシナガバチは、イモムシなどを狩って幼虫に与えるのでカリバチ（狩り蜂）とよびます。ハナバチは、体中が毛でおおわれている種が多く、クマバチやマルハナバチはその典型です。最近巣から大量に失踪したりして話題になったセイヨウミツバチも、ハナバチの一種です。植物とも密接に関わりのあるハナバチから筑波山をみると、どんな筑波山の姿がみえてくるのでしょうか。

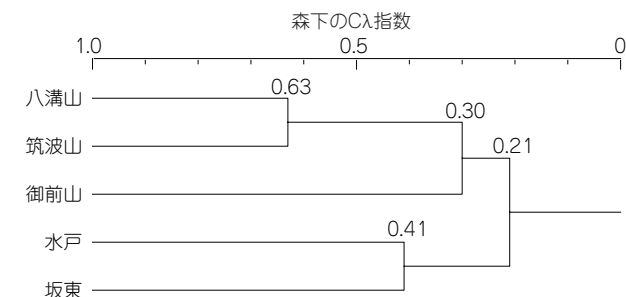
1997年に筑波山の北斜面、筑波ユースホテル跡地までの林道で、春から秋にかけて野生のハナバチ5科40種974個体を採集しました。なお、野生ではないはずのセイヨウミツバチとセイヨウオオマルハナバチも記録されているため、それらを加えると数は2種ふえます。この採集結果を他の地域と比べてみましょう。筑波山と同様に調査した結果をみると、八溝山、御前山、水戸、坂東が、それぞれ58種、43種、55種、43種でした。筑波山の北斜面は、ハナバチの種数は比較的少なく、あまりすみやすい場所ではなさそうです。次に、出現種とその個体数を基にして計算する“森下のCλ指数”を使って筑波山と他の地域の類似度を比べてみると、八溝山や御前山に近い種構成を示しました。このことから、筑波山は関東平野の中にそびえる峰ですが、八溝山地（福島県白河市南部から茨城県

と栃木県の県境付近を南下し筑波山に至る山地）の特徴を示しているといえます。

筑波山山腹のハナバチ相を調べただけでは、筑波山全体を語ることは困難です。そこで、異なる環境のハナバチ相を調べたいと考え、今年には八溝山地の南端に位置するつくば市小田、宝篋山山麓でハナバチ相を調べることになりました。この調査地は、筑波山周辺で棚田がみられる場所で、山際には広い草原があったり溜池が散在したりします。ここはハナバチの個体数が非常に多く、6月までの調査で1,000個体ほどを採集しました。中には茨城県初記録となるホソメンハナバチ（*Hylaeus macilentus*）もいました。山腹とはまた違った様相がみえてきました。秋に開催する第50回企画展「筑波山」では、この宝篋山山麓の調査の進捗状況を速報します。

地域の自然を丹念に調べ、それを比べていくと、今までとは違った観点から自然を見つめ直すことができるので楽しみです。一連のハナバチ相調査も、宝篋山で8か所目になりますが、地域ごとに特徴ある結果がでてきており、まだまだ調査は続きそうです。

（資料課 久松正樹）



ハナバチ相からみた各地域の類似度。森下のCλ指数を用いて測定した類似度を基に作成した樹形図。枝が近いほど似通った地域といえる。



ホソメンハナバチ。体長5mmほどの非常に小さなハチ。多くのハナバチには長い毛があるが、メンハナバチには少ない。

ニックネームは筑波石!?

当館野外の自然発見工房近くに、開館を記念して植えられたスタジイとその記念碑があります。

この記念碑は「筑波石」とよばれる斑れい岩できており、表面は緑がかったイボ状になっています。これは含まれる鉱物のうち斜長石が先に風化してくぼみ、輝石や角閃石の部分が残ったため、筑波石のもつ特徴でもあります。

こういったイボ状の表面にはコケが生えやすいため、筑波石は石材と

して庭石などによく利用されています。

なお、一般的に筑波石とは、筑波山をつくる斑れい岩が崩れてふもとに堆積したのですが、その中に時折混じる花崗岩類も筑波石とよばれることがあります。

記念碑の近くには、切断面がみえる斑れい岩もあります。直接ふれて、石をつくる鉱物の色や形を観察してみたいかがでしょうか。

（ミュージアムコンパニオン 中村由美）

小さな発見ーミュージアムコンパニオンー



スタジイと記念碑(上)、斑れい岩(下)

男体山と女体山の斑れい岩の色はなぜ違うのか？ ～研究ノート2～

筑波山は主要部が斑れい岩という、かたくて風化、侵食に強い岩石でできているため、山頂付近はとても急峻な地形をしています。また、山麓部は花崗岩からなり、谷間ではその上を土石流堆積物などがおい、緩やかな斜面が形成されています。これらの斑れい岩と花崗岩は、それぞれ陸上で恐竜が絶滅する時期の前後に当たる約7500万年前、約6000万年前に、地下でマグマがかたまってできた深成岩です。筑波山はのちにこれらの深成岩が地盤の隆起によって地表まで持ち上げられ、かたい岩石からなる部分が侵食でとり残されてできた“残丘”です。

男体山と女体山の斑れい岩の色はなぜ違う？

筑波山の山頂付近はすべて斑れい岩でできています。ところが、男体山頂の斑れい岩は黒色を帯びているのに対し、女体山頂では緑がかった灰白色にみえます。これは、斑れい岩を構成する鉱物をみると、男体山では黒い輝石や角閃石の割合が多いのに対し、女体山では白い斜長石の割合がとても多いため、女体山頂では部分的に斜長石の割合が90%を超える、斜長岩とよばれる白い岩石もみられます。このように筑波の二つの峰の斑れい岩は色がずいぶん違います。

この違いは地下でマグマがゆっくりと冷えていく過程で生じたものです。マグマだまりの中では、斜長石

や輝石、角閃石、カンラン石などがゆっくりと結晶化します。このうち斜長石の結晶はマグマより比重が小さいため、マグマの中を浮き上がりやすい性質があり、やがて斜長石はマグマだまりの上層部に集まります（結晶分化作用）。ここでは、融けた状態のマグマの中にたくさんの斜長石が浮かんでいる状況になります。女体山付近の白色を帯びた斑れい岩はこの上層部のマグマからできたと考えられます。



マグマだまりでの結晶分化作用（約7,500万年前のイメージ）

筑波山は結晶分化作用でできた層状岩体か？

では、筑波山の斑れい岩全体が、このマグマだまりがそのままかたまってできた姿なのでしょうか。

筑波山の斑れい岩にみられる、鉱物の配列によるしま模様注目してみると、その傾きは多くの露頭で50°～90°と急傾斜です。マグマだまりの中で鉱物が比重分離して層状構造ができる場合、しま模様はほぼ水平に形成されるため、筑波山の斑れい岩の特徴と異なります。この急傾斜のしま模様からは、マグマだまりで斜長石が多い部分と少ない部分に分かれたマグマがさらに上部の地層中に移動して固まり、それぞれ女体山と男体山の斑れい岩をつくったという可能性も考えられます。今後、筑波山の全体像を理解するためには、岩石学的な研究によりマグマの動きの解明を進める必要があります。（資料課 小池 渉）



黒っぽい輝石斑れい岩（男体山）



白っぽい斜長岩質斑れい岩（女体山）

ホトケドジョウ

当館第3展示室「水の生きものコーナー」では、3種類のドジョウを展示しています。その中で、今回は小型水槽で飼育展示している「ホトケドジョウ」を紹介します。

この魚は、水温が低く流れがゆるやかな川に生息し、筑波山周辺でもよくみられます。日本固有種ですが、生息数が減少し絶滅危惧種に指定されています。体長は6cm程度で胴回りは太く、地方名では「ダルマドジョウ」ともよばれています。浮袋が

発達していることも特徴で、水底の砂に潜るよりも水中を遊泳していることが多いようです。雑食性で水生昆虫や藻類などを食べています。当館ではアカムシを与えていますが、同居しているゲンゴロウの餌を横取りするところが見られます。もしかしたら、餌への強い執着心が一番の特徴なのかもしれません。

ホトケドジョウは、流木の下に隠れて顔を出していることが多いのでぜひ探してみてください。

おさかな通信

（水系担当 大森教弘）



ホトケドジョウ

筑波山の菌類

～研究ノート3～

当館では、茨城県内の自然を解明するため、「総合調査」を実施しています。この調査では、当館の職員だけではなく、さまざまな大学や研究機関の研究者による調査チームを編成しています。菌類に関しては、2006年からはじまった第Ⅱ期総合調査に、国立科学博物館、筑波大学、茨城大学、森林総合研究所の研究者をはじめとする総勢10名のメンバーが集結しました。実際の調査では、さらに、当館職員、大学生、一般の協力者などたくさんの方々に参加しました。2006年から2008年の3か年、筑波山で実施された第Ⅱ期第1次総合調査の菌類調査だけでも、30名近くの方が当館の菌類の調査に関わっています。

この総合調査によって、筑波山の菌類相が次第に明らかになってきました。1994年から1996年に実施された第Ⅰ期第1次総合調査では、筑波山には284種の大型菌類（キノコをつくる菌類）が生息することがわかっていました。第Ⅱ期第1次総合調査では新たに6種の大型菌類を筑波山で発見することができました。中でも、アカハチノスタケは、日本では沖縄県に次ぐ2例目となる貴重な発見です。

菌類とひとくちにいても、いわゆるキノコをつくる大型菌類から、キノコをつくらないカビのような菌

類までさまざまです。当館の第Ⅱ期総合調査では、このキノコをつくらない菌類にもスポットを当てました。今回は、植物に寄生するさび病菌の綿密な調査が行われました。さび病菌は農作物に被害をおよぼす病原菌を含むことで注目されることが多いのですが、それだけではなく、さまざまな色や形をもち、寄生する植物と関係しあって複雑な進化をとげてきた興味深い菌類です。今回の調査により、筑波山だけでも81種のさび病菌が存在することが明らかになりました。これらの結果は、2009年に当館が発行した報告書「茨城県西部および筑波山周辺地域の菌類」にまとめられています。なお、第Ⅰ期と第Ⅱ期を合わせると、当館の総合調査だけで、筑波山には400種近くの菌類が生息することが確認できました。

菌類の分類ははまだ発展途上で、今回の総合調査でも、種までの同定（種名を決めること）ができない菌類が数多くありました。今後、そのような標本の研究を進めるとともに、さらに現地調査を重ね、筑波山や茨城県全体の菌類相の解明に少しでも近づいていきたいと考えています。今後も当館の菌類調査チームの活躍に、どうぞご期待ください。（資料課 鷗沢美穂子）



筑波山で新たに発見されたアカハチノスタケ（撮影：早乙女梢）



筑波山のカタクリ葉上に寄生していたさび病菌の一種（*Uromyces erythronii*）（撮影：山岡裕一）

コシガヤホシクサ

2009年9月11日に、下妻市砂沼でコシガヤホシクサが白い可憐な花を咲かせました。砂沼では16年ぶりのことです。コシガヤホシクサは、世界中で埼玉県越谷市と下妻市砂沼の2か所でしか確認されておらず、現在ではその自生地は全て消滅してしまった野生絶滅種です。しかし、地元の方々が生子を保存していたため、筑波実験植物園を中心にコシガヤホシクサを野生に復活させるプロジェクトが進められてきました。そ

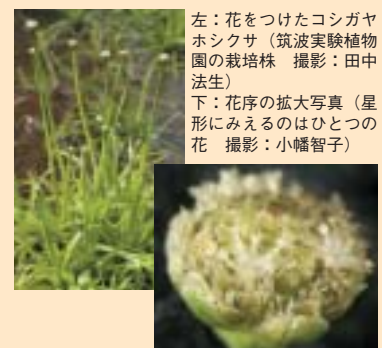
して昨年、最後の自生地である砂沼に再び種子をまき、発芽・開花・結実させることに成功したのです。

コシガヤホシクサの丸い花序は6～7mmほどの大きさですが、さらに小さな花がたくさん集まってできています。ホシクサという名前のとおり、ひとつひとつの花をよくみると、かわいい星形をしています。

砂沼での野生復帰の試みは今年も続けられており、私もメンバーのひとりとして活動しています。今年も可憐

季節の話

な星形の花がみられるよう、強く願っています。（資料課 鷗沢美穂子）



左：花をつけたコシガヤホシクサ（筑波実験植物園の栽培株 撮影：田中法生）
下：花序の拡大写真（星形に見えるのはひとつの花 撮影：小幡智子）

トピックス

○「旅する鳥たち」展を上野動物園で開催

上野動物園西園のズースポットという場所で、7月13日から9月12日の2か月間、「旅する鳥たち」という展示会を開催しました。これは、今年の3月から6月にかけて当館で開催した第48回企画展「空の旅人―渡り鳥の不思議―」が好評だったため、当館と上野動物園の共催というかたちで実現した展示会です。空の旅人展の展示物を一部活用しながら、渡り鳥の魅力をもう一度たくさんの方々を紹介できる機会をいただきました。実物の渡り鳥を観察することができる上野動物園というすばらしいフィールドで、本展示会を開催できたことを大変うれしく感じています。

上野動物園では、たくさんの動物たちが私たちを出迎えてくれますが、シジュウカラガンやオオヒシクイなど、野生ではなかなかみられない貴重な鳥たちが、ケージ内ばかりでなく、園内をふつうに歩いています。渡り鳥についての展示と本物の両方を堪能することができた、鳥好きにはたまらない展示会だったと思います。(教育課 伊藤 誠)



「旅する鳥たち」展のようす

○夏休み特別展「地球は生きものの宝庫だ！」を開催

「地球に生きものは何種いるの」「日本の昆虫は何種類」…。生きものを相手にしている人々にとって、これらは永遠の課題なのかもしれません。

たとえばハチの既知種数は80科12～15万種とされており、これは全脊椎動物の優に2倍以上の数です。さらにアリ※(約1万種)だけで哺乳類の2倍以上、ハナバチ(約2万種)だけで魚類の数に匹敵します。こうしてみるとだけでも地球上にはたくさんの生きものがあること、そのなかで多くの人々に接することがないものも数多く存在していることがわかります。

7月17日(土)から9月12日(日)に開催された当展示では、地球に生きるさまざまな生きもの種数を紹介するだけでなく、その姿を実感してもらうために、世界最大の花「ラフレシア」からキノコやコケ、大きな哺乳類から小さな昆虫まで、さまざまな形や大きさの標本を当館の収蔵庫より選りすぐり展示しました。これら

は地球の生きもののごく一部でしたが、国際生物多様性年の今年、改めて「地球は生きものにあふれている」ことを感じとっていただけたのではないのでしょうか。
※アリはハチのなかま (資料課 久松正樹)



「地球は生きものの宝庫だ！」展のようす

○乾し海苔をつくろう

8月8日(日)に、企画展記念イベント「乾し海苔をつくろう」を、東京都大田区の「大森 海苔のふるさと館」のご協力をいただき、実施しました。

午前中は、グループに分かれ、海苔のふるさと館の職員とボランティアの方に指導していただきながら、海苔付け体験をしました。午後は、浅草や大森での海苔養殖の歴史についてのレクチャーを受けることができました。海苔職人だったボランティアの方々との体験談も興味深いものでした。レクチャーの後には、参加者全員で「のり検定」に挑戦し、海苔についての問題を解きながら、館内を楽しく見学しました。

参加者からは、「はじめての貴重な体験ができた。」「何気なく食べていた海苔にはすごい歴史があったということを知った。」「海苔が前より身近に感じられるようになった。」などの感想がよせられました。

ノリの収穫は冬の寒い時期で、乾し海苔の生産も冬に行われます。今回のノリは、海苔のふるさと館のスタッフの方が、このイベントのために冬に収穫したノリを冷凍保存しておいてくれたものです。改めて海苔のふるさと館の方々に感謝です。(教育課 船木昭芳)



海苔付け体験のようす

太古から人々に親しまれてきた筑波山



筑波山を望む平沢宮衛遺跡（平沢）



江戸時代の往来が忍ばれる家並（神郡）



石の階段は江戸時代につくられた参詣路（筑波）

筑波山を詠んだ歌の一部

日本書紀の記述から

日本武尊

「新治筑波を過ぎて幾夜か寝つる」
かがりびとねり
篝火の舎人

「かがなべて夜には九夜 日には十日を」

これが連歌のはじめとされ、筑波山には連歌嶽とよばれる岩があります。

万葉集から丹比真人国人の歌

「筑波嶺を外のみ見つありかねて 雪消の道を
なづみ来るかも」

小倉百人一首から陽成院の歌

「筑波嶺の峰より落つる男女ノ川 恋ぞつもりて
淵となりぬる」

「西の富士、東の筑波」と並び称され、朝に夕に色を変え、その美しさから「紫峰」ともよばれる筑波山。

はじめて関東地方に移りすんできた旧石器時代の人類から現代の人々まで、男体山、女体山の二峰をもつことから、生産のシンボル、神のすむ山として多くの

人々に愛され、信仰されてきました。「古事記」には、倭建命（＝日本武尊）東征のおり、筑波山に登拝したことが書かれ、「常陸風土記」には、男女が歌を詠みあう歌垣のようすも伝えられています。また、「万葉集」に詠まれた歌の数は、富士山より多いことから、筑波山が昔からいかに人々に親しまれていたかがうかがわれます。さらに、室町時代頃には「筑波千軒、小田千軒、北条三百六十軒」と歌われ、筑波山のにぎわいが想像されます。

筑波山が最もにぎわうのは江戸時代です。筑波山が

江戸の鬼門の方角にあたることから徳川家の祈願所と定められ、更に三代將軍家光の時代には社殿の改築が行われたからです。その時、建築に使う長い材木を運びやすいように直線的な運搬道路までつくられました。その後筑波山の参詣道として開放されたのが、今に残る北条から神郡を通って筑波山神社に至る道です。この道は「日本の道百選」にも選ばれ、往時の信仰の道を今に伝えていきます。

2005年には、つくばエクスプレスが開通し、つくば駅からシャトルバスも運行され、今ちょっとした筑波山ブームになっています。（教育課 中山静郎）

編集後記

今年は、印象に残る筑波山の風景を二度自宅からみる事ができました。4月にもかわらず雪化粧を施された筑波嶺と、つい先日視界全面に広がる朝焼けの中に見た、まさに「紫峰」の勇姿です。10月からの企画展「筑波山」。茨城の誇る百名山の晴れ舞台をお楽しみに。（T.T）

【交通案内】



＜車ご利用の場合＞

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- ＜鉄道・バスご利用の場合＞
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」又は「猿島行き」
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- 東武野田線愛宕駅下車
～茨城急行バス「岩井車庫行き」
～「自然博物館入口」下車、徒歩10分



【開館時間】

午前9時30分から
午後5時まで
（入館は4時30分まで）
※ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
大人	720円 (580円)	520円 (420円)	200円 (100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円 (50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円 (30円)	300円

(注)：()内は団体料金(20名以上)
未就学児・満70歳以上の方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。次の日は入館料が無料です。
●5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
●11月13日(茨城県民の日) ●春分の日
●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)
【休館日】
●毎週月曜日
※9月20日、10月11日(月)は開館し、翌日が休館となります。
※12月27日(月)～1月1日(土)は、休館となります。



自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)

A・MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2010年9月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL0297-38-2000 FAX0297-38-1999
URL http://www.nat.pref.ibaraki.jp/
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しみ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。